

阿部喜三男先生を悼んで

阿部先生（政治経済学部教授、教養論集刊行会会長）の死は、全然予期されなかったこと、はいえないが、かくも早くとは誰も予想しえなかったことである。数年前東京女子医大の心臓血圧研究所の病院に入院されたこともあったが、その後は比較的元気に過ごされてきたのである。しかし、本年初頭以来とかく元気を失われ、入学試験後は病床に過ごされる日が多くなった。それでも学校のことを気にかけてられ、時には授業の準備といわれ、傍目にはいたいたしかったが、学校に出かけて来られたこともあった。夏には一時比較的恢復されたが、その後は余病も併発され、一進一退の状態のうちに十一月二十二日の未明に亡くなられたのである。私たち比較的先生の近辺にあったものは、再び以前の健康な姿には戻りえなくとも、せめて一病息災のうちになられたのである。私たちが比較的先生の近辺にあっては、再び以前の健康な姿には戻りえなくとも、

由来健康に留意されることの薄かった先生であるが、そのことは逆にいえば研究の一筋に道を歩んで、他を顧る余裕に乏しかったともいえよう。余暇を慰めるものとしては酒であった。酒間たまたま私たちが健康についていうことがあってもむしろそれを外道としてしりぞけられた。それは研究一筋のきびしさの現れともいえよう。先生の俳文学、就中芭蕉の研究について云為する積りはないが、真実を追求し、他を切り捨ててゆかれた寸毫許さぬ実証的態度は、先生の生活態度にもあらわれていたものといえるかも知れない。先生に接せられた人々は先生の温和な面を思い出されるであろうが、きびしい一面もあったのである。お宅の方々の話によっても、地震・雷・火事・親父的な家父長的一面も持たれていたようである。

小軀斗酒を辞さなかった先生も、近年は酒量を減せられ、今春東京医大病院入院以後はまったく口にされなくなった。しかし、私たちがお伺いすると、それをすゝめられる余裕は失わなかった。私も先生とのお付合は二十年の余に達する。その間かつて私がカリエスで転地療養中遠路お見舞頂いたことも思い出草である。昨年の秋は宮嶋夏樹先生が忽焉として逝かれた。阿部先生も六十一才、まだ今後を期待しうる年であったのに、それから一年余、あたかも後を追うごとくにして逝かれました。今は無然たる思いにかられるばかりである。

（十二月十三日記 松山 亮次郎）